
2人で1人の勇者様

ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2人で1人の勇者様

【NZコード】

N7364Y

【作者名】

ハル

【あらすじ】

桜庭優と紅葉穹は両親がおらず、2人ぐらし。そんな2人が家を出たら異世界に召喚されて勇者になっていた。1人は大魔術師、もう1人は精霊術師となり2人で1人の勇者となる。名前だけ勇者は魔術学校に通い、そこでの日常と、微妙なバトル展開をお楽しみに。最後に説明下手ですいません。

結論（総論）

まずはじめに、いろんな小説を読んでいただき、ありがとうございます。

召喚

入学式に行こうと家を出た、桜庭優だ。そして今、親友の紅葉穹は家から出た瞬間に、目の前が真っ暗になり、目の前に変なオッサンがいた……。

「なあ穹、俺達って……入学式に行く途中だったよな？」

「そうだね。僕達は普通に家を出たら、ここにいたと思つよ」

そう2人はいつも通り一緒に家に出て、今日から始まる高校の入学式に参加しようとしていたのだ。

それが、何故こうなったのかは2人に全く心当たりが無かつた。

「君達が異世界から来た者達か？」

2人にとっては、目の前のオッサンが話してる意味など言葉は分かっても、全く理解していないだろう。

「あなたが言つてることが全く理解できないのですが

窓の言葉にオッサンが少し考える。

「お父様、いきなり召喚されたのです。状況が飲み込めてないと思ひますか……」

「おおそうだった。いきなりここに召喚したんだ。混乱するのも無理はない」

オッサンの隣には、いかにも王女様と思われる美少女が座っていた。その容姿は長い銀髪に翡翠色の目、それにその思わず見惚れてしま

「ついに整った顔が印象的だつた。

と言つことは、オッサンはもしかしたら国王様なかもしれない。

「ソーリーが日本でないなら、僕達が異世界から来た者だと思いますや

「こいつ時の君は冷静に物事を考えられる。

それとは逆なのが、その隣にいる優だ。

「なら、君達が異世界から来た者だ。ここはスビル王国。君達の日本と言つ国は聞いたことがない」

「話は変わりますが、僕達はどうして異世界に召喚されたのですか

?」

君はあまり感情を顔に出さない場合が多い。そして、今も顔に出さずに冷静を装っている。そんな君の心情が分かるのは、生まれてから、ほとんどの月日を過ごした優だけだ。

「つむ、それも話さなくてはならないな

「つまり、君達は勇者として召喚されたんだ」

「「はー?」」

優と君は声を揃えて答える。これも、過ごした月日が成せる事だらう。

「勇者と言つのはな、戦争にならないための抑止力としての役割がある。勇者として異世界の者を召喚するのこの國だけだが、どの國でも勇者は最強の名を有する

2人は言葉に詰まる。脳の処理能力の方が追いつかないのだ。

「つまり、俺達は戦争の時には戦うけど、それ以外ではただの勇者つて称号持つてることですか？」

「そういう風に捉えてもらつてもよい」

「でも勇者が2人つてのはどうしてなんですか？勇者つて普通は1人だと思うのですが」

そう、普通は勇者は1人。漫画やゲームの世界では勇者は1人しかいないだろう。

「君達2人で勇者だからだ」

王様の答えは2人で1人の勇者らしい。

2人で1人と言うのは、中学卒業と同時に2人だけで生きてきた2人にとつてピッタリな言葉だ。

「それで、勇者を引き受けてくれるか？」

この質問に対する答えは決まっている。断つても元の世界には帰れないだろうし、無理矢理にでも勇者にするだろう。

「いいぜ！」「分かりました」

返事に2人の性格が現れてるが、これが2人なのだ。
それに、2人とも勇者と言うのは満更でもない。
活潑的な優はともかく、それとは対照的な寧までもが…。

「では、勇者の腕輪を」

「どこからか魔術師のような格好の男が来ていて、手に持った盆の上の腕輪を差し出してくる。

「それは、その国の勇者にしか着けられない。それも勇者の人数分だけ用意されるらしい。今までには1人しかいなかつたが、今回は2人で1人だからな」

王様が笑いかける。それを無視して2人は腕輪を手に取る。触れた瞬間に激しく光り、いつの間にか優と穹の手首には腕輪が着いていた。

「その勇者の腕輪は所有者の望む形状に変化し、その能力を発揮できる。あとは、腕輪が教えてくれるとしか、書いていない」

王様は先代の勇者が書き記した本に書いていたことを述べる。

「それでは2人には魔術学校に入り魔術を学んでもらう。それまでに初級魔術を娘のフェルミに習いなさい」

王女のフェルミがこちらに一礼してから近づいてくる。

「あ、あの、よろしくお願ひします」

優の手を握つて挨拶する彼女の表情を見れば、今の彼女の心情が手に取るように分かるだろう。

「優、いきなりフラグ立てるところは流石だよ

優も窓もかなりのイケメンだ。2人とも自覚はしていないが、お互
いがモテる」とは理解している。

「えつ、フラグなんて立つてないだろ?」

自覚なしの優にとっては、いつも通りの反応だし、この光景も特別
珍しいというわけでもない。

「それでは、今日はゆっくり休んでください。明日から、この国の
地理や歴史、魔術と簡単に教えるので」

「はーい」「分かりました」

優は気のぬけた返事で、窓は事務的に返事をする。

召喚（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

特にお気に入りと評価お願いします。

契約

異世界に召喚された日は、フェルミが2人を城の中を案内した。そして2人はと言えば、城で見たこともない料理、フカフカすぎるベッドを堪能したのだった。

「優さん、甯さん、早く起きて下さー」

フェルミが直々に2人を起こしに来る。本来の客人は起しへんに行かないし、王女が行つたりなどするはずがない。

つまり、異世界から来た人物、あるいは勇者とはそれほどの存在だと詮づことだ。

ただ、今回の場合は少し意味が違う。

「早く起きて魔術の練習をしないと、入学式までに初級魔術もできませんよ?」

そう、一週間後は魔術学校の入学式で、初級魔術から始めるが、それぐらいは出来て当たり前なのだ。

「……おはよー」

甯が先に起きる。

だが、その隣のベッドで寝ている優は一向に起きる気配がない。

「てい」

「いってえー、竈、何すんだよ？」

竈が布団をめくつて、太ももを思いつきり抓つたのだ。
それは尋常じやない痛さだつただろう。

「優が起きなかつたからね。ちょっとしたスキンシップだよ」

「限度つてもんがあんだろ！」

「起きない人が悪いんです」

竈は意外と子供っぽい一面もある。今回がいい例だろ。

「あのお、食事が終わつたら、魔術の練習をしたいのですが……」

「りょーかいー」「分かりました」

恐る恐ると語り掛けるフュルミに、2人はそれぞれの返事を返した。

朝食を取りながら、フェルミが予定を話し終わる。

「じゃあ、朝と昼は魔術で、夜は歴史と地理を口にしちゃ」と。つてことでよろしいですか？」

「はい、それで間違ひありません」

竈が事務的に質問し、それに、フュルミも答える。

竈は基本的に馴れない相手には、敬語や余所余所しい態度を取つて

しまつのだ。

「魔術ってどんなのをやるんだ?」

「まだ説明してなかつたですね」

魔術には、いくつか種類がある。

魔法、精霊術、この2つを纏めて魔術と呼ぶ。

魔法は自らの魔力を使い、不可能を可能にする力。

例えば、何もない場所から火を生み出すことも、不可能なことを可能にしたという捉え方もできる。

次に精霊術は、自らの魔力を使い、精霊を召喚する力。

例えば、火の精霊を召喚し、その力を剣に纏わせたりできる。他にも精霊を使って魔法紛いのこともできる。上位の精霊になると、その精霊の属性の魔法を打ち消すこともできる。

魔法は発動が早いのと、応用が効く。

精霊術は威力が大きく、上位精霊にもなると天災のようなことも起こせる。

お互いに利点があるので、どちらの方が優秀と言つわけでもないのと、今の時代まで生き残っているのだ。

「と言づわけです。何か質問はありますか?」

一通りに魔術のことを説明したフェルミに、優が手を擧げる。

「はい、ハウさん」

フェルミの顔が少し赤い。やはり一目惚れをしていたらしく。

「魔法と精霊術は分かつたが、両方使えたりするのか？」

「基本はどちらかしか使えません。ですが、歴代の異世界から来た勇者の方々は、両方使えたりらしいですよ」

「じゃあ、俺達も両方使えるのか？」

「それは、そうなんではないでしょうか。ちなみに私は魔法の方を使います。それと、精霊術師は数がそんなに多くないので、魔法使いの方が多いんです」

「」で窓ガ手を擧げる。

「あの、精霊つて……契約とかいるの？」

「契約は必要ないはずです。呼べるか呼べないかですしね。あつ、精霊王と上位の精霊は契約が必要らしいです」

「なら、僕は使えると思います、精霊術

「どうゆうの」とか説明して頂いても？」

さつきは両方使えるかもとは言つたが、両方使える人間を見たことがないので、少し信じきれない部分があるらしい。

優が言つてたら、信じたかもしれないが……。

「昨日の夜に夢を見たんですね」

「内容を話してもうつても?」

穹は小さく頷く。

『小僧、力を求めるか?』

真っ白な空間にいる穹は、田の前にいる女の子から質問を受けた。

女の子は、見た目的には同じ年くらいだが、その内側に大きな何かを感じる。それが精霊王の魔力なのだが、穹には未だに正体が分からぬ。

『小僧、力を求めるか?』

「同じ年くらいなのに、小僧はやめもらいますか?」

同学年の女の子に小僧と呼ばれて、いい心地はしないだろう。

だが、白くて長い髪に、赤い目、そして整った輪郭の彼女には、その言葉が可笑しかったのか小さく笑みを浮かべる。

『小僧、精霊王である私に、そんなことを言つてきたのは小僧が初めてだ』

「そりゃどうせ」

『小僧は、力を望んでここに来たのだろう?』

『貰えるものなら、貰つていきますよ』

『何のために力を望む?』

竜は少し考える。

『今の僕にとって大切なものは、親友で家族の優だけです。ですが、これから大切なものが増えて、僕が守れるぐらいの力は欲しいかな』

『つまり、他人を護るために力が欲しいのか?』

『そういうことです』

『おもしろい。ならば、私が小僧と契約してやります』

『けつこうですか』

予想外の答えに精靈王が固まる。

『では、力がいるのか?』

『それはあります』

『だから、精靈王の私が力になつてやるつと……』

「分かりました。で、僕は必ずいんすが?」

『私と契約するから、手を出してくれ』

「はい」

『精靈王オーベロンは、此の者を契約者と認める』

簡単に言うと、精靈王オーベロンの体が光り、その光りが穹の右手の中指に集まり、その場所に指輪ができる。

「これって、どうなってるんですか?」

『私と契約したから、指輪になつて、小僧と行動を共にするだけだぞ。必要なだけの魔力を流してくれる、実体化して戦うこともできる』

「うーん、とりあえずは分かりました」

「と、まあ、そんなことがあつました」

「それって凄いことですよ? 精靈王の契約者なんて、100年以上出てきません」

「あつ、やつぱつ夢じじゃなかつたんですね」

「くそう、俺が精靈王狙つてたのに

優が本氣で悔しそうにする。

「僕の勝ちだね、優」

「大丈夫ですよ、ユウさん。精靈で負けても、まだ魔法があります」

「…そうだな。魔法で窓より凄いの使えるばいいのか」

「はいー。」

すぐに立ち直った優に、すぐさまフュルニアは返事をする。

契約（後書き）

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

特にお気に入りと評価お願いします

「では、魔術の基礎を教えます」

「はーい」「お願いします」

優は幼稚園児のような返事を返し、窓は丁寧に返事を返す。

「まず私は魔法しか使えないでの、精靈術のソラさんはイメージだけ掴んでください」

魔法にはいくつかの属性がある。

代表的なものが4大属性の火、水、風、土がある。

それとは別に光、闇、雷、氷、無属性がある。

それぞれの属性には、初級魔法、中級魔法、上級魔法、最上級魔法がある。

例外として、無属性魔法にレベルはない。

そして、精靈術にもいくつか決まりが存在する。

精靈王を頂点として、火、水、風、土、光、闇、雷、氷の上位精靈が存在する。

下位、中位の精靈は呼び出しても実体化しないが、上位精靈になると実体化する。

そして、上位精靈になると呼び出すのに、合意が必要になる。ゆえに悪人が上位精靈を呼び出して天災を起こそうとするることはできない。

それぞれの属性の精靈は、その属性しか使えないが、精靈王のみ例外として、それぞれの属性を中位精靈ぐらい使って、更に分解と再

生を使いつぶしができる。そこが精靈王と呼ばれる所以である。

「魔法と精靈術の説明は以上です。そしてまずは精靈術ですが、教科書通りに言わせていただくと、上位精靈を呼び出すには精靈の名前を、下位と中位の精靈を呼び出すには頭の中イメージするだけで大丈夫です。私は精靈術は使えないのですが、ここまでしか分かりませんが大丈夫ですか？」

「はい。方法さえ分かれば、後は僕が自分でやりますから」

「魔術学校に入れば専門的な部分も教えてもらえるので、続きは学校で教えてもらつてください」

「分かりました」

申し訳なさそうに言いつフホルミニ、竜は優しく笑顔で答える。

「まずは初級魔法から入るので、右手を前に出して掌の上に炎の球体をイメージして下さい」

「おおーすげー」

掌の上には炎の球ができていて、それを見て興奮している。

「ゴウさん、さすがは勇者ですね」

「……できない」

「えつ……」「

フェルミと優の声が重なる。そして声の主である竈の方を見る。

「なあ竈……できな『つ』……！』れがか？」

「うそ」

「それって……センスないんじゃね？」

「だよね」

竈がさつきよりも落ち込む。

「なあフェルミ、苦手な属性だから出来ないとかつてあるのか？」

「そりやたしかに上級魔法にもなれば得意属性しかできませんが、初級魔法は魔法が使える者なら誰でも使えますよ」

「じゃあ、俺は精霊術が、竈は魔法が使えないってことなのか？」

「普通の人はそうです。あと、事実としてソラちゃんに魔法が使えないのよ、おやらくはそういう思います」

「だってさ。竈は精霊術しか出来ないらしいぞ」

「魔法のセンスはないんだよね」

竈がどんどん落ち込んでいくので、すかすかフェルミがフォローに入る。

「精霊術はこの世界で最強になれる可能性があります。それで充分

じゃないですか

「世界最強……いいね」

竜がだんだん元気になつていいく。

「優、精霊術を極めて、精霊術で魔法に勝つよ」

「望むところだ」

「じゃあ、僕は離れたところで練習してくるよ」

「ああ」「あつ、はー」

竜が離れたところに行く。

「では続きですが、次は掌から水球を出してみてください」

その後も練習は続き、初級魔法は全属性一回まで使えるようになつた。

次からは中級魔法も試していこ。

魔法の練習も終わり、王宮にある2人の寝室

「なあ竜、精霊つてどのへんまで出せた?」

「僕は下位の精霊なら全種類出せたと思うつよ」

「初級魔法は全ていけたから、俺と同じか」

「じゃあ優には魔法のセンスがあるんだね」

「魔法使いはけっこうこうからな、その中でトップって並んでやつたら分かるんだ?」

「最上級魔法を全属性使えたら最強なんじゃない?」

「たしかにそりゃ最強だな」

「あつでも、最上級魔法って4大属性しかまだ確認されてないらしいよ?」

「じゃあ、他の4つも俺が作れば歴史上最強だな」

「だね」

「じゃあ、寝るか」

「わづだね」

その日から魔法の練習をして、優は全属性の上級魔法まで、今は4大属性の上位精霊まで呼び出せるようになった。

そして、魔術の練習ばかりしていたので、地理や歴史を全く勉強してないことに気づいたので、魔術学校入学の一週間から猛勉強することになった。

初級魔法（後書き）

ただひたすらに魔術学校の話が書きたくて、超展開にしてしまったことを、今この場を借りてお詫びします。

誤字・脱字・質問があれば感想欄まで願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願ひします。

入学式

「なあ、入学式って普通は4月じゃないのか？」

「4月だと毛虫が出るから貴族が嫌がるんじゃないかな」

「あつ、そうだな」

「えつ普通は5月じゃないんですか？」

入学式に行こうと王宮を出て、魔術学校までの道のりを歩く途中、優と穹の会話にフェルミがつっこむ。

「僕らのいた世界では4月にやるんだよ」

穹のは初めて会った人や、信用でしない人には敬語を使う。だが、フェルミとも半月以上の付き合いなので、敬語ではなく優に使うものと同じような口調になっている。

「珍しいですね」

「俺らからしたら、こっちのが珍しいんだけどな」

「そんなのですか？」

「さうだよ。それに僕達は入学式の日にちに来たからね

「やついえば勇者の仕事って何かあるのか？」

「やつですねえ……」

優の問いかけにフェルミは少し考えるよつた仕草をする。

「あります」

「「えつー?」」

「どうしたんですか?」

「いや、仕事がないなら、ビリして呼んだの?」

「仕事はないですが、戦争を起こさないための抑止力にはなります。勇者を相手にするだけでも、敵国の戦力はかなり落ちますから。それに、この国の勇者は一国の兵士が全員かかってきても勝てる。つて有名ですから、名前だけの勇者がいればそれでいいんです」

「名前だけでいいなら、別に召喚しなくても他の奴使えばいいんじやなかつたのか?」

「それはダメです。4国合同の魔術大会とかの国交を深めるイベントには勇者の参加が絶対です。その場で中途半端な人物を出しては、国の威信にかかる問題になります」

「そうゆうもんなのかね」

「じゃあ、他の国の勇者も召喚してるの?」

「他国の場合には、国内から選んでるらしいです。魔術大会での優勝者、王族の中で一番腕の立つ者、貴族院の話し合いで決定していく

すね。そして、その勇者はそれぞれが勇者の武器を持つています

「僕らの腕輪も武器なの？」

「勇者の腕輪は変形する武器です。使い手の望む形態に変化します。そして、使い手の魔術を纏わせることが可能です。私は見たことがあります。先代勇者は剣に魔法を纏わせてたらしくですよ」

「これってそういうて使うのか」

勇者の腕輪を見ながら言つ優に、フェルミは驚愕の表情を向ける。

「もしかして知らなかつたのですか？」

「うん」

「腕輪はどうして使い方を教えてくれなかつたのでしょうか？」

「本当は教えてくれたりせずに、知つてる人から聞いて使うのかもね」

「だな」

「残念ながら、私もそう思います」

15分ほど歩いたところで、大きな建物の前に到着する。
大きさは大学くらいあり、敷地もそれぐらいはある。

「エリカ?」

「ナウですよ」

「でかいなあ

「来るのは初めてですか?」

「王都から出たことないし、仕方ないじゃねえか」

「確かに外出しませんでしたね」

フェルミが顔を背ける。

これは、後ろめたいことがある者の態度だ。

「フェルミ? ディーヴィー?」

「いえ、何も」

「ああ、そうか」

「分かつてゐから言わないで下さることよー」

「優、やめたげなよ。フェルミは僕達のカリキュラム設定をミスマッチたことを、突かれるのが嫌で顔を背けてるんだから」

フェルミは涙目になりながら抗議する。

「いやあ、ついね?」

「つこね？じゃありません。ソラちゃんの性格がこんなに悪いとは思いませんでした」

「あー、窓の奴は基本的に猫被つてるからなあ。本性を出すつてことは、フュルミが信用されてるつてことだ」

「……それなら許しますけど、面葉には気をつけて下さーね」

「フュルミも無理のない計画をね？」

「あああああ、聞こえません。私は何も聞こえません」

フュルミはまるで小学生のような反応をする。校内に入り、入学式の会場らしき場所を探すが、正門からは少し距離があるらしい。

「あー、じゃあフュルミの好きな人言つむかうよ？」

「嘘です。すいません」

「なあ窓、フュルミの好きな人って誰なんだ？俺の知ってる奴か？」

「知つてゐつて意味なら、よく知つてと思つよ」

(本人なんだし)

「俺のよう知つてゐる奴つて窓ぐらいしか知らないんだぞ。つてことは窓か？」

「相手が僕なら、フュルミがこんなにバラされるのを、恥ずかしが

「うな」と呟つけどね

「それもやうだな。まつ別にいつか。俺には関係ねえし」

「……むしろ重要人物です」

「ん? 何か言ったか?」

「なんでもありません!」

「俺なんかしたか?」

「うーん……強いて言つなら、この女心を踏みにじつた、かな?」

「とりあえず、悪い」

「そんな誠意のない謝罪はこりません」

「じゃあ、俺にどうしようと?」

顔を真っ赤にしながら「ハハハ」は手を差し出してくる。

「……会場につくまで、手を繋いでくれたら許してあげます」

「ん? そんなことでいいのか?」

「はい」

手を繋いだ優の顔も真っ赤になつている。

それを見て窓は一矢二矢とニヤつきながら、2人を見る。

(やつにえば、女の子と手を繋ぐのって、小学校以来じゃないか?.
こんなに緊張するもんだったつけな)

(「へ、どうしてコウさんは、そんなにいつも通りなんでしょう。
これじゃあ、私になんて全く興味なしじゃないですか）

「.....」

「.....」

(ヤバい、この緊張で、この静かさは精神的に辛いぞ。何か話題を、
何か話題を。窓の奴、楽しんでないで、何か話せよな)

優は窓にアイコンタクトで、何か話せとの意図を伝える。たすがに
人生のほとんどを共に過ごしてきたからか、窓は何を伝えたいのか
を理解する。

(何も話さなかつたら、緊張するのが伝わってしまうのではない
でどうか。何か話題を.....。でも、いきなり手を繋がせたりしたら、
いくら鈍いと言つても、そろそろ私の気持ちを気づいてくれてもい
いですよね)

真っ赤になりながら手を繋いでいる2人を、窓は「ヤーヤーしながら
見つめる。まるで、悪戯でもする子供のような笑みで。

「なんだかそうじると、カップルみたいだね

「.....」

「……」

フェルミが顔を真っ赤にして俯いてしまつ。優は窓を怒りの形相で見る。

それに窓は悪戯が完了した子供のような笑みを浮かべる。

(窓の奴、この場面での今の発言は地雷だろ?・フェルミがかなり怒つてゐるじゃねえか)

(ソラさんはいつたいどここまで私の心を抉れば気が済むんでしょうが。コウさんもソラさんをあんなに睨みつけて、そんなに私とこ、恋人扱いされるのが嫌だったのでしょうか)

「ねえ2人とも、……もつ付いたけど?」

「じゃ、じゃあ

「は、はい」

優の方から切り出して、手を離す。

(あ、あぶなかつたぜ。それより窓が何をしたいのか全く分からないんだが……)

(うう、やつぱり私は優さんに、女の子として認識してもらつてないのですね。でも、私は諦めません。いつか絶対、私に告白させてみせます)

優は冷や汗を拭い、フェルミは決意を新たにして、ガツツポーズする。

そして、長つたらしいと思わせて、それほど長くもない校長の挨拶を聞き、入学式は終了する。

ちなみに、優と穹とフェルミは同じクラスになつたが、それはどこぞの国で、どこの王様が手を回したからだとは、3人とも知るよしもなかつた。

入学式（後書き）

なんかラブコメ展開にもつていかれそうですが、魔術学校での話は、恋愛・魔術戦闘を1・1または、3・4ぐらいにしようと思つています。

まあ、他の作品よりはラブコメ寄りってぐらこですかね。

あつ、あとணドリ的展開とかは予定してないです。むしろやるつもりはないです。

まあ、その時の気分にもよりますが……。

あと、作者がハッピーエンドを望んでるので、悲しいヒロインは出さないつもりです。

最後に

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願ひします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願ひします。

クラスメイトと班決め

「えーっと、桜庭優です。趣味はなし。優って呼んでくれ」

「ユウさんは貴族じゃないことになつてるので、苗字はいりません」

「えつそなのか?……優です。以上」

フェルミが自己紹介に小声で指摘してきたので、言い直す。言い直した後の自己紹介で窓が苦笑いを浮かべる。

「窓です。優とは兄弟みたいなものです。よろしくお願ひします」

窓が丁寧に自己紹介をして、その後も数人続き、優の隣に座るフルミも無事に自己紹介を終える。

「じゃあ、今から訓練合宿の班を決めてもらいます。自己紹介も終わつたことですし、各自がミニミニケーションを取つて、6人の班を作つてください」

真面目そうな女性の担任の指示で6人班になることになる。それぞれ数人は見知つた顔があつたのか、そちらに声をかける。

「じゃあ、俺達3人は確定つてことでいいかよな?」

「僕は問題ないけど、フルミは王族だし、貴族の人と組まなくていいの?」

「お父様はそれなりに面識がありますが、私はパーティーなんかで

の上辺だけの付き合いです。それほど親しいわけではありません。
あつ、でも、幼馴染の子はクラスにいますね」

「じゃあ、呼んできたら？」

「やうします」

クラスのほとんどが立ち歩いて話しているが、優達は席を立たなかつた。それはフェルミ以外にこの世界で面識のある人物がいないうらだ。

そこに、1人の少女が歩いてくる。

「あつ、あの、あなた達も平民出身ですかね？」

「『も』つてことは君も？」

「そ、そうです。それで、……平民同士で同じ班になれたらなあ、つて思いまして」

胸に掛かるか、掛からないぐらいの茶色の髪に、フェルミほどではないが整つた顔立ちをした小柄な少女が話しかけてきた。

「このクラスに平民つて俺らだけなのかな？」

「あつ、はい。他は貴族の方か、それに使える方のみで、完全に平民は私達だけです」

平民でも貴族の援助を受けて、将来はその家に仕えることもある。目の前の少女以外の平民は皆そのよつとして、魔術学校に通つているのだね？」

「僕はいいけど、優は？」

「いいんじゃねえか。フールミも賛成すると黙りこゝ、名前……なんだっけ？」

「あつ、すいません。わたしはエリンっていいます。コウさんとソウさんですね？」

「はい、合つてますよ。それでエリンさん。貴族の援助なしで、どうやって魔術学校に通えてるんですか？」

「それはですね……商人をやつてる家系なんですが、貴族よりの平民なんで蓄えはわりとあるんですよ。それに私は家を継げませんし、魔術の才能がありましたから、魔術師として生きていこうと思つたんです」

「そうでしたか。突然聞いたりして申し訳ありません」

「いえいえ。では、そちらはどうやってなのですか？」

「あー、俺らはな？」

「うふ」

エリンの背後から来る2人の人物を見て、2人とも説明に困る。

「コウさん、ソウさん、連れてきました。ん?」この子は誰ですか?」

「「新メンバー」」

エリンを見ながら言つフヘルミ、2人ともフヘルミを見ながら答える。

「ハルー？」

何を言いたいのか分からぬ声を漏らしながら、エリンはフヘルミの顔を見ながら慌てる。

「あつ、さうでしたか。これからお願ひしますね」

「ソラリ、ソラリ、ソラリよろしくお願ひいたします王女様」

「そんなに緊張しないで下れ。あと、私のことは気軽にフヘルミつて呼んでください」

「そそそ、そんな恐れ多い。お、王女様を呼び捨てになどできません」

「私は気にしませんのに……」

エリンの反応を楽しんだ後に、優が声をかける。

「つてことで、俺達は王様に援助されてるんだ」

「つてことで、わたしは何と凄い方に声をかけてしまったのでしよう」

「僕ら自体は凄くないですよ。それに、僕らは王様に保護されてるみたいなもんですから」

「モ、そつなんですか」

エリンがホッとして胸をなでおろす。
さつきから慌ててているエリンが小柄な体躯からか、どうも幼く見え
てしまふ。

その様子をフェルミの後ろから顔を覗かせる少女が見ていた。

「ねえねえフェルミ、あなたの本命はどっちなの？」

「アイラー？ な、何を言つてゐるよー。」

「えつ、だつて2人とも凄いカッコイイじゃない。で、どっちが本
命なの？」

「言ひません！」

顔を赤くしたフェルミが拗ねて顔を背けてしまつ。
窓は面白がつて、優にバレないようになに優の方を指差し、それに気づ
いたアイラが優を見てニヤニヤする。

「それで、その子がフェルミの幼馴染か？」

「あっ、うん。あたしはアイラ＝クリスティー。王国の魔術騎士団
の団長の娘で、フェルミの幼馴染よ」

「俺は優で、こつちは窓だ。あと、その子がエリン。よろしく

「エリナ、よろしくね。でも、あと一人足りないわね」

「誰か呼んでくれるか？俺らは知り合いいないから」

「うん。分かつた」

この、赤い髪を肩に掛かるか掛からないかぐらいの長さにしている、整った容姿の中性的な雰囲気をかもし出してる少女がフェルミの幼馴染のアイラらしい。

アイラは教室中を見渡して、すでに4人ほど男子が集まつたグループの中に、目的の人物を発見する。

「ヒューイー！」

「アイラさん！？」

「あんた、婚約者なんだからこいつちの班に来なさいー。」

「無茶言わないで下さい。自分はもう班を決めてますから」

「うん、分かった。でも、こっちの班に来なさい」

「分かつてないじゃないですかー！」

「分かるのと納得するのは別よ。いいから来なさい」

「はあ、やうまいひこうといじいので、すいませんが失礼します」

ショートカットの金髪に、どちらかと言つてイケメンの部類に入る青年がアイラの婚約者のヒューイ。

ヒューイはメンバーに出て行くことを伝え、アイラ達のいる方までとまどぼと歩いてくる。

「じゃあ、これで6人揃つたな」

「けつこう無理矢理感はあるけどね」

「つう、わたしだけ立場が変です」

「私達は気にしないから大丈夫ですよ」

「せうだぞ、あたしから見たらヒューリーの方が立場ないから」

「それってどういう意味ですか？あつ、自分はヒューリー＝フラムスティードです。長いのでヒューリーとお呼びください」

優、竜、エリン、フュルミ、アイラ、ヒューリーの順で並ぶ。
そして、誰もヒューリーの突然の自己紹介には何も言わず、そつとじてあげている。

「意外と強そうだね」

「確かに、ユウさんとソラちゃんがいれば心強いです」

「いや、フュルミ、ソラは強いが、俺はまだフュルミに勝てないと思つぞ」

「やつですか？私はユウさんが本気になれば負けると思いますが

「知り合い相手に本気で戦えないから、今は負けてるな」

2人で話し始めたところ、アイラがニヤニヤしながら入ってくる。

「公共の場でイチャつくなー。」

「い、イチャつこいなどありません。アイラはいつからそんなに面白こじょークが言えるようになったのですか?」

「ジョークねえ? フェルミはコウのこと好きなの?」

「あ、そんなこと言つたらコウさんに失礼です」

「ふーん、否定はしないんだ」

「あなたそろ慮めるのは可哀想ですよ?」

アイラはニヤニヤしながらかつていたが、同じくニヤニヤした窓に止められる。

フェルミは顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「フェルミ様がコウ君を好きで、アイラさんがヒョーライ君の婚約者」

エリンは小声でぶつぶつと状況を整理していく。

周りから見たら今のエリンは小動物を連想させて、かなり可愛いだ

るべ。

「あー、何この可愛い生物。食べちゃいたいー。」

「ア、アイラさんー?」

「いこじやない、いこじやない。女子同士なんだからわあ

「こけませんよー。」

アイラは可愛いもの好きなのか、エリンに抱きついている。

「自分は田立ちませんが。頑張るのよろしくお願ひします」

「あっ、うん、頼む」

無理矢理連れてこられたことこそ、半ば開き直ったヒューリイが優によう分からぬアピールをする。

「意外とこのチームだと何とかなりそうだね」

「だな」

優と窓はそれぞれクラスといつ空気に懐かしさを覚えるのだった。

クラスメイトと班決め（後書き）

次回からは訓練合宿でキャンプ行きます！

先に目的を言つておくと

1、クラスメートとの親睦を深める。

2、クラスメートの実力を知り、より精進しようと努力すること。

ですかね

つてことで、読んでいただきありがとうございます。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願ひします。

訓練合宿？

「そう言つわけで、今日から2日間合宿です。とりあえず明日まで生き残つてください。じゃあ解散」

パンツと手を叩き、それが合図なのか他の生徒が皆それぞれ適当に歩いていく。

「なあフェル!!」これって合宿だよな?」

「そうですよ」

「サバイバルの間違いじゃねえよな?」

「違いますよ。サバイバルはまた別にあります」

「とりあえず明日まで生き残れ糞ヤローー!!」って解釈していいんだよな?」

「そこまで酷いか知りませんが、概ね合つてると想っていますよ」

「そうか……」

優は珍しく落ち込んでいるようだ。理由は分からぬが。

「優つて昔から、いついついかにもめんどくせそうな嫌いだもんね?」

「ん? ああ確かに昔から嫌いだったかもな」

「じゃあ、どうする？全員で協力する？それとも個人戦？」

「わ、わたしは皆さんと協力したいです。まだ死にたくないです」

「あたしはどちらでもいいよ」

「自分も夜は安心して寝たいの、夜だけ一緒にいいです」

「私もヒューリーさんと一緒に」

「エリン、アイラ、ヒューリー、フョルミの順で発言するが、けっこつ見事に意見が分かれる。

「俺はどうでもいいぞ」

「僕もどうでもいいけど、間を取って夜だけ一緒にいいよね？」

「ヒューリー、襲ったら殺すからね？」

「じ、自分は襲いませんよ」

「慌てて[お]そ[そ]するヒューリーに、アイラがジト目で見る。

「ふーん……まあいいけど。それで集合場所は？」

「田が沈む川へ、川でいいんじゃねえか？」

「優にしては珍しくまともな意見だね。じゃあそれでいい？」

全員がそれぞれ頷いて、全員適当に森の中の散策を始めた。

この訓練合宿は、冒険者が依頼を受けて討伐に行つたりする森で普通に行われてるため、魔獣もそこそこ強いのが出たりするのだ。

「何かいねえかな」

全員と別れてから10分ほど優は一人で森の中を探索していた。この合宿では食料も自分で調達しないといけないので、魔獣を倒したりして食料を調達しないといけないのだ。

ガサガサ

「おっ！？」

テンプレだが、優のはるか前方から何か来るのが分かる。

「グガアアアアアア」

（えつ、何この声？威嚇なのか？もしかして、めちゃくちやヤバイのが来てるんじゃね？）

声を聞くまではドキドキしていた優だったが、今は別の意味でドキドキしていた。

そして、目の前にその姿を現す。

「えーっと、その……人違いです」

それだけ言つて回れ右。駆け足前、進め！で一気にかけていく。

魔獸と言つより魔物の外見は、大きさが5mもあり、人型で縁の体に赤い目があつた。

通常の冒険者が討伐依頼を受ける「ブリンよりも、更に上位に位置するオークゴブリンだつたのだ。

オークゴブリンの討伐は通常Bランクの冒険者からで、魔術学校の一年生が簡単に討伐できるものではない。

それに

「あんなの食うとこねえじゃねえかよ」

そう食べるところがないのだ。

つて言つよりも食べれるところはあるかもしけないが、とても食べる気にはなれない。

「グガアアアア」

オークゴブリンはまた意味の分からぬ吼え方をして、優を追いかける。

「くつそお」

〈カマイタチ〉

優の手から放たれた〈カマイタチ〉がオークゴブリンの足を捉えるが、皮が切れた程度で特にダメージはない。

「硬すぎだろ！」

「エクスプロージョン」

火の上級魔法でオークゴブリンを何度も襲う。5分ほどずつと「エクスプロージョン」したところでは、オークゴブリンの生死を確かめる。

「おっ、死んだか」

縁だつた体は真っ黒になつており、といひにいひの一部が無くなつていたが、人型をした炭の塊にしか見えない。

「あーっ、しんど。何か見つけて帰らないと窓の奴がつるさいやなあ」

そう言つて、優はまた食料探しの探索に出た。

優がオークゴブリンと戦つた4時間後、窓は何故か森から山岳地帯に来ていって、そこの魔物に遭遇していた。

「あらまあ、道に迷つたと思ったら、変なのに遭つちゃつたよ」

そう言つた窓の前にいるのは大きただけで15mはある怪鳥だった。

某狩りのゲームに出でくるヤクックに似ているが、決してヤンククではないと言つことにしておこう。

窓を見るなり、空へと飛び、口から炎を吐いて攻撃してくる。

「えーっと、とりあえず新兵器試してみようかな。銃〈ガンナー〉」

竜の声と共に勇者の腕輪が光り、その姿を長銃に変える。

「あのサイズの魔物に効くのか試さないとね」

〈凍結弾〉

氷の下位精霊を纏つた弾が放たれ、怪鳥に命中する。命中した場所を中心に、半径1mほどが凍りついているが、大きなダメージは与えれていないようだ。

〈炸裂弾〉

「ブレイク」

火の下位精霊を纏つた弾が、怪鳥の手前で、竜の声と同時に大きな炎を巻き上げる。

炸裂弾の爆炎の直撃をくらつた怪鳥はけっこつなダメージを負つたようだ、さきほどまでのよくな素早い動きはできないでいる。

「もう一発炸裂弾食らわせれば死ぬと思つけど……最後に大技試してみようかな」

〈水龍弾〉〈放電弾〉

水の下位精霊を纏つた水龍弾と、雷の下位精霊を纏つた放電弾が、ほど同時に撃たれる。

放たれてすぐに水龍弾は、水でできた5mほどの水龍のよくな形になる。

その中に放電弾が入ったまま、まっすぐに怪鳥の方へ飛ぶ。

〈ブレイク〉

怪鳥まで3mほどのところで放電弾から、かなりの雷が放電される。どんどん水龍が小さくなり、怪鳥の目の前で水龍の姿は無くなつた。

〈ブレイク〉

放電弾が放電した時に撃つておいた炸裂弾から、爆炎が放たれ、それがすぐに大きな音と共に大爆発を起こす。

「やつぱりできた。でも、威力が強すぎるから至近距離でやつたら自殺行為かな」

最後の大技は、水龍を放電弾で電気分解し、怪鳥の周りに大量にできた水素に炸裂弾の爆炎が引火して、大規模な水素爆発を起こしたのだ。

一瞬の出来事で怪鳥は真っ黒にはなつてないものの、全身が酷い火傷ですでに死んでいた。

「これなら食べれるかな」

〈重力弾〉

土の下位精霊を纏つた弾を怪鳥に撃ち、重力をほぼ0にする。効果は一時的だが、何度も繰り返せば一人でも運べるのだ。

「はあ、こんなに食べれるかな」

そう言ひて御は怪鳥を担いで、さらに4時間かけて戻るのだった。

それを見た他の生徒は、怪鳥が大きすぎて窓が見えず、怪鳥が現れると大慌てだつたらしい。

訓練合宿？（後書き）

はあ、優の戦い方が普通です。けつこうショックですね。
捻ろうにも、捻れない戦い方です。王道すぎですね。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願ひします。

訓練合宿？

「なあ 窓、その鳥どうしたんだ？」

「迷つてたらいきなり襲われたから、とりあえず食べれるかなって思つて持つて帰つてきた」

特に変わったこともないかのよつと窓が話す。

他のメンバーはそれを呆れて声も出ないと行った表情で見ている。そこで、今まで魔術を教えてきたからなのか、一番驚きの少なかつたフェルミが代表して声をかける。

「窓さん、その魔獸はデスフレアと言つてですね、冒險者が山岳でのクエスト時に炎のプレスで殺されてるから、そんな名前で呼ばれてるんです。それにデスフレアは冒險者でもCランクのパーティー、または個人でもAランクレベルでないと普通は倒せませんよ」

「……デスフレアなんて自分は初めて見ましたが、さすがに大きいですね」

「あたしも自分でそれなり強い方やと思つてたけど、さすがにコレには勝てないわよ」

「（）こんな大きな魔獸初めてみました。窓君凄いです！」

フェルミの後に、ヒューイ、アイラ、ヒリンとそれぞれ感想を述べる。

その中で2人だけ違う意味で悩んでいた。

「なあ窓、これってどうやって食つんだ?」

「焼いたらいいんじゃない?鳥だし」

「でもよ、こんなでけえ鳥初めてだぜ?味付けも変えねえと途中で飽きるだろ?」

「セニは優に任せるよ。優の方が料理得意だしね」

他のメンバーは2人つてほんと仲いいな、ともいってたげな目で見ている。

この後にその矛先が自分に無垢とも知らずに……。

「他の奴の方ができるかもしけねえぜ?」

「じゃあ聞いてみれば?」

「こらなかに料理が得意な奴はいるか?」

2人の会話を見ていた全員が、周りを少し見てから答える。

「私は王族なのでしたことがないですよ」

「あたしやったことないわ。公爵家だししなくてもいいしね」

「お、お菓子なら少しほどできます」

「自分に聞くのは野暮つてもんです」

フェルミとトライラは貴族だから必要なことの「こと」。ヒーリンはお菓子

しか作れないらしい。

ヒューバイに至つては……キッチンの中も見たことがないかもしだい。

「らしいよ？ 頑張つてね料理長」

「窓、お前も少しは手伝え！」

「僕は調達してきたからいいんじゃないの？ それより僕は何も捕まえなかつたの？」

「いや、俺は……アレを倒したんだが……アレはさすがに…食えんだろう？」

「……確かにね、僕もアレは食べたくないよ」

珍しく歯切れの悪い優の態度を、オーケゴブリンの姿を見て納得するのだった。

真っ黒に焦げてるが、さすがに5mはある人型の魔物など食べたい人などいないう。

ヒューバイとアイラは呆れ顔を浮かべ、エリンは驚いて声もでないらしい。

「……見なかつたことにして、『テスフレアの話を続けよう』

アイラの呼び掛けに、全員が無言で元々そのつもりだつたのか頷く。

「油とか調味料がないから唐揚げはできないし……、焼き鳥とかステーキ系しか無理だと思つよ」

「唐揚げって何ですか？」

「えつー?」「えつー?」

フェルミの疑問に優と穹が同じような反応を示す。

それとは逆にフェルミ、アイラ、ヒューリー、エリンはそれが普通の反応のみで、答えが返ってくるのを待っている。

「唐揚げって言つのは……僕らの住んでた国にあつた料理だよ」

「そ、そうだぜ」

フェルミは元の世界の料理だと分かっているので、別に異世界か來たことを隠さなくていいと思つているのだが、2人は違つたようだ。

穹は淡々と語つてゐるが、優は嘘を誤魔化す子供のような雰囲気をしていた。

穹は絶対に嘘が上手いが、優は嘘をついてもすぐに見つかりそうだ。

「優と穹は同じ国出身ですか？」

「えつー?」

「えーっと……極東つて言われるくらい、かなり東に行ないと着かないかな?」

「疑問系なのが気になりますが、とりあえず遠っこから来たことだけは分かりました」

ヒューリーの質問はしていくる予想はできる質問だが、いや言われる慌

ててしまい、窓も嘘を誤魔化す子供のような雰囲気になってしまった。

「もうめんどくせえから丸焼きでいいんじゃねえか?」

「ちゃんと中まで火を通してね」

「私は本来ならテーブルマナーを揃ねるような行為はどうかと思いまが……優さんが作るのであれば食べたいです」

「あたしはそれでいいよ」

「自分もこの際食べられれば何でもいいです」

「わ、私もそれでいいです!」

アイラとヒーリンは賛成、ヒューアイはお腹が空きすぎていたらしい、フルミに至つては特に触れない方がよさそうだと、2人は感じた。

「よし、でも俺がやると焦げるから、誰かやってくれよ」

「優さんが焼くのではないのですね……分かりました。ここは私の手料理を食べてもらいます!」

「あつ、うん。がんばってくれ」

フルミの宣言に優は半ば適当に返してしまつ。

「火加減が分かりませんが……いきます」

「フレア」

フェルミが火属性の初級魔法で「テスフレア」を焼く。
だが、フェルミ以外の全員が同じ感想を今持っていた。

「火小さすぎだろ！？」こんな感じで、朝になつても焼けねえよ！」

「なつ！？やつぱり火が小さかったのですね……やつぱり私には無理みたいです。誰かやってください」

「……はあ、じゃあ僕がやるよ。銃」ガンナー

誰も料理しようとしてないので、竈が溜息をつきながら、勇者の腕輪を銃形態にする。

「竈巻弾」

竈の銃から放たれた、風の中位精靈を纏つた弾が「テスフレア」のちょうど目の前までくる。

「ブレイク」

「武装カマイタチ」

弾が「テスフレア」を包むほどの大きさの竈巻になる。

そして、その中の「テスフレア」がカマイタチで斬られていぐ。

「危ないから離れててね」

「炸裂弾」

「ブレイク」

カマイタチの竜巻の中で炸裂弾から、大きな爆炎が出る。竜巻が爆炎を巻き込み、炎の竜巻になる。

「やうそろこいかな」

窓がそうじと竜巻が小さくなつていき、皿代わりに取つておいた大きめの葉っぱの上に集まつて落ちていく。

「さすが窓、いいかんじの焼き加減だな」

肉の見ながら優が感想を述べる。

「あんな武器は見たことありませんが、凄いです。精靈術をほとんど完璧に使いこなしてますね」

「テスフレアを倒したのは本当みたいね」

「こんなに細かいコントロールができるとは凄いですね」

「わ、私はもう何を見ても驚きません!」

フェルミは多少驚いていたものの、主に銃に驚いていたらしい。アイラはテスフレアを倒したところから疑つてたみたいだ。ヒューイは武器よりも精靈術に驚いている。

エリンは口では驚かないと言いつつも、顔はかなり驚いている。

「じゃあ食つか

「そうだね」

一口では食べれないが、かなり小さく切られた肉は案の定完食はできなかつたので、放置していたら何故か朝には無くなつていた。

訓練合宿？（後書き）

久しぶりですが投稿します。

作者自身がキャラの感じを忘れつつあったので、少々キャラが変わつてるかもしません。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願ひします。

訓練合宿？

「優起きて」

T
Z
Z
Z

「返事がない。ただの屁のよつだ。……じゃなくて、起一モーラー」

『起きる』の声とともに足を思いつき、優の腹に命じさせる。窓が無言で笑顔を浮かべて、優の腹の上に足を向ける。

「むぐつ、い、いきなり何すんだよ！」

優がいつまでも起きないから仕方なかつた

だからここで踏むことないだろ！？

声にならない声を上げた優が、必死に追求するが、穹は急に真剣な表情になる。

—
•
•
•
—

「何か言えよ！ てか、そんな真剣な顔して何かあつたのか？」

「……肉が……朝用に取つておいた肉が無くなつてた。優以外に犯人は考えられない」

穹が涙目で言つたが、優には全く心当たりがない。

「一つ言つたが、俺じゃない！外に置いてたから魔獣にでも食われたんじゃないのか？」

「夜通し見てなかつた優が悪いと思います」

片手を挙げながら穹が言い、優が呆れた顔をする。

「何で俺が不眠番なんだよ！てか誰が不眠番してたんだ？」

「……決めてない」

「全員が寝てたのに、よく魔物とかに襲われなかつたな。って言いたくなるぞ、それは。」

呆れ顔のまま優が言つたが、ちなみに他のメンバーは昨日歩きつかれたのか、就寝中である。

「優は頭悪いから、何度も徹夜で受験勉強してたし、優に任せたことにしようと思つたんだけどなあ」

「今『つもつ』って言つたよな？」

「……言つてない」

「田逸らじながら言つた奴のこと信頼できねえぞ」

優と穹がいつものように話していると、モゾモゾと何かが動く。

「アレ? 一人とも起きるのが早いですね」

「おはよツフルミ、僕たちは元の世界では、新聞つて言ひ情報誌の配達やつてたから朝は早く目が覚めるんだよ」

（今の時間は7時くらいだから、別に僕たちじゃなくとも起きてると思つんだけじね）

「そうでしたか。では、他の方も起こしましょつか」

「あつ、よひしへ。じゃあ、僕と優は朝ご飯取つてくれよ」

フェルミは視線を一旦肉の置いていた方を見て、肉がないのを確認してから、他のメンバーを起こしに行く。
それに伴い優と穹も朝食探しの旅に出る。

「優、肉も飽きたし魚にしようよ」

「俺はまだ食えるけど、魚でいいか」

「じゃあ……川はいっち」

「なんで方向音痴の穹が川の位置が分かるんだ?」

優にとつて穹は今まで一番一緒にいる時間長い人物だ。
その穹が方向音痴なことも知っているのだ
それ故の疑問だった。

「あー、僕つて精霊術師でしょ?だから、精霊がどの辺りに集まつ

てるのが、何となく分かるんだ。それで、水辺付近は水の精霊が少し多く集まるから分かつただけだよ」

「精霊術って便利だな」

「精霊術は物に纏わせるのが前提だから、魔法の方が使い勝手は格段にいいと思うけどね」

「ああ確かに。精霊術師って不意打ちだと弱そうだしな」

優の発言に、一瞬だけ穹がその表情を歪める。
自分が精霊術師だから、今の発言は精霊術よりも魔法の方が優れると言つてゐるようになつてゐたのだ。

「そうでもないよ？ 精霊が敵意とか魔力を感知して、必要な時は教えてもううつむかひにしてるから」

「もう何でもありだな、精霊術って……」

「精霊王と契約してるから、精霊を自由に使えるんだよ」

「精霊王と契約とか…… 穹つて実はチート主人公なんじゃないか？」

「それを言つたらこの勇者の腕輪貰つてゐる時点で、一人共けつこうチートだよ」

「うへ、確かにそつだな。おっ、確かに川に着いたぞ」

現時点では穹の方が強いと思つてるので、話題を変えた。

「『確かに』ってことは信じてなかつたんだね

「まあ、それはいいじゃねえか。それよつと、魚捕らひやせ」

また、話題が戻りそうだったので、別の話題に変える。

「全部で6匹は捕らひないとね」

「今日は俺がやる」

「じゃあ、僕は見てるから、できたら呼んでよ

そう言つて窓が川原の石に腰を下ろす。

その様子を見ていた優が、思わずため息を漏らす。

「うっし、やるか」

優は体内の魔力の一部を指先に集中させる。

<スパーク>

指先から雷が放たれ、水中を流れん。

本来は相手を麻痺させて、しばらく無力化させる補助系の魔法だが、川の魚にとつてはそれだけでも、けつこううらうらじい。

「よし、後は魚を回収して帰るか

水面に浮かんできている魚を優が全て拾う。

数にして10匹ほどで、少し多いが食べれない量じゃない。

「窓、帰らひせ」

「あつ、もつ終わったんだ」

「俺を誰だと思つてんだよ。勇者だぜ？」

「それを言つたら僕もだけどね」

窓は全く魚を持たず、優が全て持つて皆が待つてゐる場所まで行く。

「なあ窓、何か強い魔力を感じないか？」

「精靈が教えてくれたから分かつてゐよ。でも、そんなに大きな魔力は魔術学校にはいなし、かなり上位の魔物か何かだろ？」

「魔物だと思うが、その方向が問題だ」

「少し離れてるから距離までは分からぬけど、どこでいるの？」

「俺達の拠点だ」

それを聞いて、驚きの表情を表す。

優がすぐに魔法の準備をして、窓の体に後ろから抱きつく。

「な、何やつてるの？」

「行くぞ」

「ウイング」

抵抗する穹を無視して、優は穹を抱えたまま飛ぶ。

全力で飛んだので、数秒で到着した。

「あんなの反則だろ」

「僕もあれは無理ゲーだと思つよ」

優と穹の視線の先にいるのは、ドラゴンの部類に入るが、ドラゴン種の中では最弱のワイヤーバーンだ。

最弱と言つてもドラゴン種なのでAランクに位置する。他のドラゴンとなるといわんや以上なので、まだマシと言えればマシだ。

「さて、どうやって倒そつか」

二人の視線の先では、他のメンバーが魔法や剣術で応戦していたが、全くダメージを負わせれている感じではない。

訓練合宿？（後書き）

次はワイヤーバーン戦で、次の話で訓練合宿は終了予定です。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願ひします。

訓練合宿？

「アレットでどうやら死ぬんだろうね」

「おいおい他人事かよ。お前が精靈王出したら済む話じゃないのか？」

「ああそれは無理。夢の中では何度か話したけど、呼んだらすりこい魔力消耗して、その日は動けなくなっちゃつから、ほんとにヤバイ時だけ呼ぶようにって言われてるんだ」

「精靈王つて使い勝手悪いな」

「本人も気にしてるみたいだから、言わないであげて」

「あつ、うん。悪かったな」

その場にいない精靈王に同情する2人。

フェルミ、アイラ、ヒューイは未だにワイバーンと戦っている。

「ん？ おいおい、エリンがいねえぞ」

「あれ？ ほんとだじこにもいない」

そつ話ながら、風の飛行魔法を解除して、やつと3人の側に降りる。

「やつと帰ってきたわね。早くアレ倒して！」

「Hリンは？」

「Hリンちゃんは……も、も、も、も、」

アイラの言葉に、優が質問で返し、フヘルミが答える。

「え？ もしかしてエリンって食べられた？」

「……Hリンちゃんはワイバーンを見た瞬間に……動かなくなつてしましました」

「それでHリンって死んでるの？」

「あら、

フヘルミに言われた方を見る。

そこには倒れたまま動かないエリンの姿。優がエリンの側まで寄り生死を確かめる。

「……氣絶してる」

「はー？」

優の言葉に邵が思わず聞き返してしまひ。

「だから気絶してるんだって。Hリンの場合……あつえるだろ？」

「……たしかにありそつだね。でも、実際にやつてのけるとは思わなかつたよ」

「驚きすぎて許容量を超えたから、じつはたんだな。可哀想に」

「まだ死んでないけどね」

優がエリンに掌を合わせるので、穹がシシコリを入れる。

「とりあえず、アレを倒さないとな」

「無理です。さっきから何度も魔法攻撃を加えてるのですが、大したダメージは『えれでません』

フェルミ達3人の消耗のレベルから考えても、かなり強いと考えられる。

それにダメージをほとんど『えれでいないのも気になるところだつた。

「ワイバーンって防御魔法とか使うの？」

「使いませんが、鱗が成長に伴つて折り重なつて、物理防御が高く、その鱗も魔力に対する耐性がついてるので、魔術によるダメージはかなり軽減されてしまうんです」

「攻撃はどんな攻撃なの？」

「ドラゴンの種類にもよりますが、ワイバーンは火の魔法を使います。現にあのワイバーンは火のブレスを使ってました」

穹がフェルミからワイバーンの情報を聞き、作戦を考える。
だが、優も穹も基本はめんどくさがりなので、穹は自分があまり前

線に立たない方法を考えている。

「ねえ優、僕の精靈術ってね、威力よりも手数なんだあ

「魔力を多く込めればいいんじゃねえのか？」

「うん、うなんだけど、それだと疲れるんだよねえ。だからさあ優、派手に突っ込んできて」

「自分がめんどうなだけだろ?」

「そうだよ。だからさあ優、派手に突っ込んで、勝つか殺されるかしてきてよ」

笑顔で酷いことを言つ窮に、誰も笑えなかつた。

「はあ、もう何言つても無駄だろ?なら俺が突っ込むけど、魔法の対処までは手が回らねえぞ?」

「優は物分りがよくて助かるよ。魔法の対処は僕が全部やるから、安心して散つてきてよ」

「分かつたよ。俺が合図したら突っ込むからな

他のメンバーは窓の毒舌に冷や汗をかいっていた。

「2」

「2」

「 1 」

「 0 」「 行つてらつしゃーい 」

走りだす優に、穹は気の抜けた見送りをする。

「 形態変化、アクティブブーツ 」

優の声と共に、勇者の腕輪が光り、その光が足に収束しブーツが出来る。

「 おお、さすが優だね 」

アクティブブーツを装着した優は、機動力が増し、スピード、跳躍、ステップが通常よりも桁違いに上がっている。

「 じゃあ、僕も準備しますか。銃 」ガンナー

穹も勇者の腕輪の形態を変化させ銃形態にする。

「 遅いぜ 」

〈 カマイタチ 〉

ワイバーンの後方に回り込んだ優の攻撃は、全てその鱗に弾かれる。

「 ちっ、やっぱり初級魔法じゃ効かねえか 」

「 おーい優、魔力に対する耐性ってことは、防げる限界があるんだし、大技で片付けてよ 」

「無茶言つごじや、つて窓あぶな」

言いかけて、続きを叫ぶのをやめる。

優の魔法でワイバーンの意識が優にあったのだが、窓の声で窓の方に移っていたのだ。

ワイバーンは窓に向けてブレスを放つたが、窓の銃弾が当たった瞬間に炎の塊は消えてしまった。

＜ウイング＞

優が空を飛んで、ワイバーンの上空を通り、窓の真横まで行く。無傷だと分かっていても、その田で確かめたかったのだつた。

「怪我はねえみたいだな」

「あの程度じゃ怪我のしそうもないよ」

「だな」

ワイバーンが二つの間にか飛んでいたので、優も再び空へと飛び立つ。

「つまつと、あぶねえ」

ワイバーンは魔法攻撃ではなく直接攻撃を仕掛けてくる。

真っ直ぐに猛スピードで飛んできての、翼での攻撃。単純だが、当たればかなりのダメージだつ。

ワイバーンは今度は炎のブレスを放つ。

<魔力分解弾>

穹が地上から闇の中位精靈を纏つた弾を放ち、炎の塊に当たると、その魔力が分解され空氣中に霧散していく。

だが、炎のプレスの消えた中からはワイバーンが再び翼撃を加えようと突っ込んできている。

すでに、優のよけるタイミングではない。

「優、あぶない」

穹が叫ぶ。他のメンバーはレベルの戦いのせいか全くついていけずに言葉もでない様子だ。

ワイバーンの攻撃が直撃する。

バチッ

バチバチ

優の体が放電し始める。

「えつ、優の魔法かな？」

穹も何が起きたのか分かつていなかつた。

<アルターサンダー>

ワイバーンの真後ろに無傷の優が現れる。

ワイバーンが攻撃した優は、優が作った雷の分身。

＜サンダーランス＞

優が右手を横に突き出す。

分身の雷が本物の優の右手に、一直線に飛んでいく。

間にいたワイバーンの胸に穴を空けて。

胸を貫かれたワイバーンは力なく地面に落下する。
それに続いて、優も地面に降りていく。

「ビックリしたか？」

「何も言わずに次やつたら、僕が殺すからね」

「何も言えませんでしたが、泣きそうでした」

「心臓に悪いわ」

「行事で死人はまずいなって思いましたよ」

軽く怒った様子の窓に、泣きそうな顔のフェルミ、胸を抑えている
アイラに、少しづれたセリフのヒューリイがそれぞれ優に言葉を投げ
かける。

エリンは未だに気絶から覚醒しないらしい。

「お皿に湖に集まつて帰るんだよね？」

「そうです」

「じゃあ、飯食つたら時間的にピッタリだな」

竜の質問にフルミが答え、続いて優が話す。

この後は優と竜で捕つてきた魚を食べて、いろいろあつた訓練合宿は終了した。

ちなみに、ここまで上位レベルの魔物と戦つたのは、優と竜達の班だけで、他はかなり弱い魔物や魔獸しかいなかつたらしい。

訓練合宿？（後書き）

訓練合宿終わりですね。

次は魔術学校での日常を書こうか、中間テストにしようかで迷い中ですね。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。評価、感想、お気に入り登録よろしくお願ひします。

科目選択

「優さんと鄭さんは選択科目は何をとるんですか？」

「選択科目って何があるんだ？」

「体育系は嫌だなあ」

フェルミの質問に優と鄭がそれぞれ答える。

「はあ、では説明します」

魔術学校では普通の学校と変わらず授業がある。
それも国語、数学、地理、歴史、魔法学、精霊学だ。

国語は中学レベルで漢字もそこそこあるが、優も鄭も問題なく余裕である。

数学も中学レベルで鄭は余裕だが、優は少し厳しい分野もある。
地理はこの世界の地理なので、初めて習う事だ。

歴史はこの国ができるから歴史と、大陸で起こった大きな出来事。

魔法学は魔法の理論と各属性の対抗策。
精霊学は精霊術の理論と対抗策。

それとは別に選択授業があるので。

剣術、弓術、棒術、徒手格闘の中から一つ。

精霊術実践、魔法実践のどちらか一つ。

精霊術は人数が少ないので、発動がどれもほとんど変わらないので、

一括り。

魔法は4大系統にそれぞれ分かれます。

他の雷、氷、光、闇は教師がいないのと、使える生徒もほとんど皆無なので設置されていません。

「と言つことです。それで2人はどうするのですか？」

「俺は徒手格闘と火属性だな」

「僕は弓術と精霊術にするよ。『弓術だと疲れなさそうだし』

「では私も火属性にしますね。あと、徒手格闘は無理そのので私は弓術にします」

苦手な属性のない優は、見た目的に派手そうな火属性を選び、穹は動きたくないのを理由に弓術。

フェルミは優と全く同じにしたかったようだが、弓術の穹についていくことにする。

「みんなは？」

穹が尋ねると、周りに集まってきた訓練合宿でのメンバーが考える仕草をする。

「あたしは剣術と精霊術」

「わ、わたしは水属性と弓術にしようかと思つてます。ごめんなさい」

「自分は風属性と棒術ですかね」

見事な具合で全員が分かれる。土属性に人気があまり無いのは言つてはいけないのだった。

「選択科目の試験って実技か?」

「実技らしいです。魔法はお題の魔法をやつてのける。精霊術は精靈を召喚して武器に纏わせる」

「体術はどうするんだ?」

「分野毎に対抗戦をやるらしいです。『術は的を射るだけですが……』

フェルミの説明に優が納得する。

「行事での戦闘もあるの?」

「年に2回の学年別の体術戦があります。魔術を使わなければ、何でもありの大会なんて毎年けが人が出でますが……。あとは学年末に学年関係無しで校内模擬戦があります。それは魔術の行使もありますのでかない危険ですね。安全面は徹底されて死人は出たことがないらしいです」

「ずいぶん過激な大会があるもんだね」

穹が半分呆れた顔で答える。

「あとは、学校から選ばれたメンバーは他校との交流戦とかもあり

ますね

「めんどうなだけだな、それって」

「そうでもないですよ？代表に選ばれれば少なくとも、王国の騎士団への内定がほぼ決まります。そんな生徒を留年させたりできないので、選ばれれば必ず留年回避が可能です。成績が悪い生徒は皆狙いに来ますね」

「俺は、それへの出場を目標にすることに決めたぞ」

フュルミは優と鄭は勇者だから留年はなこと言おうと思つたが、優のやる気を見ると言えなくなつてしまつ。

「騎士団つて凄いの？」

「子供になりたい職業聞いたら、ほとんどの男の子が騎士つて答えますね。ちなみにアイラの父は騎士団長です」

「うおっ、それはすげえな」

「そんな凄いものじゃないわよ。家に帰つてきたらお母さんの方が強いんだから」

竜の問いにフュルミが答え、それに驚いた優に、父を褒められて嬉しいのか顔の赤いアイラが否定を加える。

「どこの世界でも夫の立場は弱いんだな」

「優さんのお父様もそうだったのですか？」

「いや、俺に両親はいねえから分からねえが、一般的にはそつちが多かった」

「……」

「いやいや、気にしなくていいって。俺も窓もそれぞれ両親の顔を知らねえから、辛かつたりしねえから」

「うう、うう、2人とも大変だったんですね」

ヒューリイがどこに感動したりする要素があつたのか、泣いて同情し始めた。

「ヒューリイ、僕は優を不本意なふがら家族だと思つてるし、たぶん優も同じだと思つ。だから別に僕達は辛くないんだけど」

「窓、ツツコミたい箇所が一箇所あつたが、今回は見逃してやる」

優がジト目で窓を批判する。そんな窓に1人の少女が近づいてくる。

「わ、わたしにできることがあれば、何でも言つてくださいね」

「あっ、うる」

「あたしも何かあつたら言つてね」

「分かつたよ」

Hリン、アイラにそれぞれ応答した窓が再び全員を見る。

「つてわけだから、これからもよろしく

返事はないが、それぞれ納得してゐるっぽい。
優に至つては何度も首を縦に振つて頷いている。

科目選択（後書き）

これで第一章は完結です。

超展開でしたが、ここからどうじょうか悩み中です。
たぶん、授業とかの日常をやった後で、中間テストがあると思いま
す。

ゴールデンウイークは……やるか分からなことです。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願ひします。

登場人物紹介

桜庭優

外見：黒髪黒目

性別：男

年齢：15歳

性格：めんどくさがり、やる時はやる、ツッコミ役多し、真面目

特技：体を動かすこと

魔術：全属性の魔法

紅葉竈

外見：黒髪黒目

性別：男

年齢：15歳

性格：めんどくさがり、どうしようもない時はやるが基本的には優に押し付ける、毒舌、猫被り

特技：トリックキーな動き、営業スマイル

魔術：精霊術

フェルミ

外見：長い銀髪に翡翠色の目

性別：女

年齢：15歳

性格：真面目、一途、お嬢様

特技：料理以外

魔術：4大系統を上級魔法まで

アイラ

外見：真っ赤の髪に碧眼

性別：女

年齢：15歳

性格：思つたことは言つ、正直、負けず嫌い

特技：剣術

魔術：4大属性の下位精霊術、火と風の中位精霊術

エリン

外見：茶髪赤目

性別：女

年齢：15歳

性格：おろおろ、可愛いもの好き、純粋、子供っぽい

特技：お菓子作り

魔術：光と闇以外の下級魔法、風と水の中級魔法

ヒューリ

外見：金髪碧眼

性別：男

年齢：15歳

性格：流されやすい、紳士

特技：社交辞令

魔術：4大属性の下級魔法、火と風と土の中級魔法

魔術学校での時間割は日本の高校とよく似ている。

50分の授業をして、10分の休み時間を繰り返すのだ。

「優、起きなつて」

「ん？ 寝か、後5分だけ」

「そんなこと言つて寝てばっかりだから、ずっと成績悪いんだよ」

今のは歴史の授業。

もともとこの国の歴史に興味のあつた窓にとっては、かなり楽しい授業なのだが、そうではない優にとっては全く樂しくない授業なのだ。

つて言つても優にとっては国語、数学、地理、歴史は樂しくない授業。魔法学、精靈学、選択科目だけが寝たことのない授業。つまり、直接的に魔術や戦闘に関わるもの以外には興味を示さないのだ。

「優さんの分のノートは私が後で見せておきますので

「フルミは優に甘いんだよ。いくら優のことが好き

「それ以上言つたら、上級魔法をあてますよ~」

「い、いえつけ」

フルミは慌てて窓の言葉を途中で止める。

笑顔で言つてゐるが、目が全く笑つていない。

「ねえエリン、窓君がフェルミを怖がつてゐるんだけど、何があつたと思つ?」

「わ、わたしは優君のことだと、思つます」

「あー、やつぱり?でも、演技とはねえ窓君がフェルミを怒らせるとしたら、それしかないもんね」

魔術学校での席は最初は名前の順だが、後は自由席なのだ。
それで、優は外を見て時間を潰すこともあるので、窓際の一一番後ろ、窓がその前、フェルミが優の横なのだ。

そして、エリンは窓際は寒いか暑いことのことで、廊下側の端で一番後ろ(端っこだと目立たないだろうとのこと)、アイラは窓の前、ヒューリーは田が悪いとのことで一番前の真ん中となつてゐる。

「優、一時間目は見逃してあげたけど、一時間目は起きててみな」

「任せとけ、眠くなかったら起きとくからよ」

「眠くなつたら寝るのだな、とは誰もつてしまない。

「せばば、寝たね

「ゆ、優さんは疲れてゐるのです。……たぶん

一時間目の授業は国語、はつきり言って優にとつても余裕の科目なのだが、授業態度が悪いとあまりいい印象は与えないだろう。

フェルミのフォローはもはやフォローになっていない。

実際に優は日頃の鍛錬以外に疲れることをやっていない。

それに、精神的に疲れてるわけでもないから、優は大丈夫だと窓は考えている。バカだから。

そして、続く三時間目、数学の時間は頑張ろうとした。うん。でも『』してた『』なのだ。

「優は昔から数学嫌いだからねえ」

「そうなんですか？」

「そうそう。順位で優よりも下が一人でもいたら喜んでたぐらいだからねえ」

「そ、そこまでなのです……」

優の実態を告げるとフェルミは固まってしまった。

「けどまあ、優は英語はかなり強かつたけどねえ」

「それは、窓さんよりも？」

「うん。僕が優に英語で勝てたことはないよ。だって満点以外取つたことないんだから、勝ちようがないし」

フェルミがかなり驚いた表情をしてから、少し考える仕草をしたあと、尋ねる。

「少し気になったのですが、英語って何ですか？」

「英語っていうのは、他の国の言葉だよ」

「優さんは他国言葉が元壁だったのですね」

「そうだよ。でも、他国言葉を猛勉強した理由が、『外国語喋れる男ってカッコイイじゃねえか』って理由だよ?」

「それは、少し…残念ですね」

「まあ、楽しんでたからいいと思つよ」

優が寝てこるからこそ、できる話なのだ。

優が起きていたら、とっくに止められているだらつ。

四時間目は地理の授業。

この授業も優にとっては眠たいものでしかないのだった。

この日は魔法学も精靈学もない、週で唯一の日なのだ。

国語、数学、地理、歴史が3単位、精靈学と魔法学が4単位、選択科目は5単位なのだ。

進級すれば、新たに誰でも使える無属性魔法や、魔工学などがある。

よつて、今日の午前中は優がずっと寝ていたのだった。

「よし飯だな

「さうと寝てたべせよへばつよ

「やんなことばつてばせはねりねえぞ」

優は毎食の入った弁当箱を隠す。

「本日の」と言つただけで、やつなるとは辛こ声の中になつたもん
だね?」「

「やつだぞ。もつと賢く生きなことな

「なり、そんなことばつて、授業中も寝てる優は晩御飯抜きだね

先ほどまで優勢かのように見えた優の顔が、どんどん引きつってい
く。

逆に窓の表情は嬉々としたものへと変化していった。

「ずついた。なら窓は明日の晩飯抜きだな

「はあ、ねえ優、こんな誰も得のしない争いをしてどうなの?..」

「うう、確かにやつだな。なり、両方やつるのは無じつといひと
いか?」「

「まあいこよ

窓の言葉で優が言い争いをやめる。

そして、優がサンドイッチの入った弁当を窓に渡す。

優と窓は魔術学校の寮に2人暮らしを始め、片方が昼食を担当したら、もう片方は夕食を日替わりで担当することになつてているのだ。朝食は夕食の残りとかで適当に済ませる。

ちなみに今日のサンドイッチはカツサンドだった。

料理が得意な優の揚げたカツは分厚くて、揚げ加減も最高のカツサンドは、普通に店で買つたら千円~一千円はしそうなほどだった。

五時間目は選択授業の中でも魔術の方だ。

この授業では基礎として魔力の性質変化から入り、初級魔法、中級魔法を習い、卒業までに上級魔法を一人一つは覚えようと言つ授業だ。

だが、はつきり言つて今は使えなくても、卒業までに学校で習わなくても上級魔法を覚える生徒も少なくない。

貴族は基本的に古くから続く魔術の家系、または今はほとんど無き戦争で名を上げたと言う家系が多いのだ。

そういうた家はその家の得意魔術や得意属性などがあるのだ。

家の得意魔術などの上級魔法などを学ぶので、学校で習つことは魔法の幅を広げると言う意味しか成さないのだ。

それとは別に魔術にも、それを得意とする家系も少ないながらにある。

そういうた家でも、得意な武器があつたりするのだ。

そして精霊術は少し変わつていて、下位精霊でも魔力の籠める量で威力が全然違うのだ。

威力を強めた中位精霊は上級魔法にも勝ることがある。

上位精霊は各属性に一体ずつしかないので、上位精霊にもなれば

かなり召喚できる者は限られてくる。

そして精靈術の授業では、各自が思い思いの武器に精靈を纏わせて、その持続時間を延ばしたり、精靈術の応用を考えたりするので、基本的に纏わせ方を学ぶ以外は自習に近い。

六時間目 の武術の選択授業では

剣術は、剣の振り方などを軽く教えた後、刃を潰してある訓練用の剣でひたすら打ち合う。

毎回パートナーを変えて練習するので、いろんな相手を対人戦闘ができるのだ。

弓術は、弓の射方を習った後は、ひたすら的に射ている。ほとんどが中心にあたる生徒は、不規則に動く的の軌道を予測して射抜く訓練をしている。

棒術でも、剣術と同じように基礎だけ教えて、後は実践で覚える感じだ。

徒手格闘は、名前の通りで武器を使わなければ何でもあり。殴る蹴る絞めるがありなので、型とか気にせずに力だけが全てだ。

六時間目も終わったら、ホームルームを済ませて、家に帰るか寮に帰るかだ。

授業内容以外はほとんどが日本と同じスタイルなのだ。

2人は寮で暮らすことにして、今日も一緒に帰るだけだった。

そして、次の行事、中間テストまでは、ずっとこんな日々が続くの

だつ
た。

口常（後書き）

授業内容説明が多かつたですね。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願ひします。

入学してから一ヶ月が経ったころに、あれはやつてくれる。

「萎える」

「どうしたんですか?」

「中間テストなんてイベントは消滅すりゃいいんだよ」

「それは無理な相談ですね」

授業が終わり放課後、優がフェルミに愚痴をこぼしていた。
教室には優、窓、フェルミ以外は既に帰ってしまったようだ。

「普段から授業やってんだから、いらねえだろ」

「その授業の内容が定着してるのが見る試験なんだから仕方ないよ

「なら、普段から勉強してねえ奴はどうすればいいんだよ」

窓の言葉への返しに、そこは威張ると、じやないだろ、と内心思つ
窓だった。
そこにフルミからの的確な指摘が入る。

「普段から勉強すればいいと思します」

「それが無理な人もいるってことを知るべきだ」

「それなら、私が勉強を教えてあげてもいいですよっ。」

フェルミが顔を真っ赤にしながら優に言つ。

「あー、それはいいわ。」う見えても窓つて一夜漬け教えるの天才級なんだわ。フェルミには悪いし、今回も窓に教えてもらうことにするわ。」

「……そうですか」

ショボーンと聞こえてきそうなほどに、フェルミが落ち込んでしまう。

だが、それに気づかない窓ではない。

「今日は優に教えるのめんぢくさいし、地理、歴史、魔法学、精霊学は初のテストだから、優に教えるような時間はないよ? 今回はフェルミに教わりなよ。」

落ち込んでいたフェルミが急に顔を上げて、優の方を見ると目が『どうしますか』と語りついている。

「なら、俺も今日は自分だけの力でやるぞ。」

再びフェルミが落ち込んでしまう。

期待したところを突き落とされたからなのか、せつせつも落ち込んでいる。

「優つて無自覚なのが、最低だよね」

「それってどうゆう意味だよー。」

「そのまんまの意味だよ。無意識に一番最低な結末を呼び込むから、他の人がどれだけ悲しんでたか」

「窓、お前は今まで何を見てきたんだ？」

少し真剣な顔で優が窓に詰め寄る。

窓は目を合わせずに横を見ながら、言つてはいけない」と言つよう霧囲氣で、ゆっくりと語りだす。

「僕、実は見たんだ。優に勇気を出して告白とも取れることを言ったのに、優が気づかなくて陰で泣いてる人達を……。」

「や、そんなことが……。だ、誰が俺に告白なんて」

「小学校の時に、さつちゃん、せーちゃん、杉山さん。中学の時に、さつちゃん、瀬川さん、佐々木君、佐藤さん、咲つて呼ばれてた人。高校入学前に、さつちゃん、澤田わん」

「サ行多すぎだろー全員サ行じゃねえか。それに何故かさつちゃん毎回登場してるじゃねえか、どんだけ諦めわりいんだよー。」

優が怒涛のツツコミ連発を続けるが、窓はそれを無視して続けようとする。

「確かに優ってサ行の人にはてるけど、優ってサ行嫌いだよね？自分が桜庭だからサ行は被るとか言ってたし」

「俺、そんな」と言つてねえぞ？勝手に話作んなよな

窓がニヤニヤしているので、遊ばれてたことに優が気づく。だが、話の途中しか聞いてなかつた人物が、当然会話に入つてくる。

「私はフェルミなのでハ行です」

「あつ、うん。それで？」

「サ行じゃないです」

「確かにそうだな」

「だから、嫌わないで下さいね」

「嫌うわけないだろ。でも、サ行だから嫌つてるつてのは、窓が言った嘘だからな？」

「優さんが好きって言つてくれた。優さんが好きって言つてくれた」

フェルミがぶつぶつと一人で呟いている。

優には聞こえず、窓にだけ聞こえていたので、窓は優の方を見てニヤニヤとしている。

「ど、どうしたんだよ」

「なんでもないよ。ただ、思わず笑いそうになる勘違いだなあって思つて」

「意味分からん」

「そのうち分かるだろ？から、大丈夫だよ。それまでは楽しませてもらひつけど。ブツ」

小さく笑つて窓、吹き出してしまつ。

「まあ、いこけじよ。窓、今日はもう帰つて、来週からのテストの勉強しようぜ」

「わうだね。じゃあねフェルミ」

「じゃあな」

「あつ、優やん、窓やん、わよひなり」

その日は帰つてテスト勉強するのだった。

放課後（後書き）

前回が長かったので、今回短めです。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願ひします。

中間テスト？

「優行くよ」

「ああ、今行く

穹の呼びかけに優が答える。

今日から中間テストと言つこともあり、優は徹夜で勉強していたのだ。
もつとも、日頃から勉強していた穹は慌てることなく、いつも通り。
優は直前から始めるタイプなので、徹夜する羽目になつた。

「普段から勉強してないからそつなるんだよ」

「普段から勉強するぐらいなら、徹夜の方がマシってもんだ」

「そこまで勉強嫌いだと、僕は優の将来が心配だよ」

穹は心配と期待を込めた目で優を見る。

この場合の期待とは、今以上に面白い人生を歩んで行くのかと言つ期待と、優が誰と結婚するのかと言つ期待だ。

「俺としては穹の方が心配だな」

「なんで？」

「さうやよ、最近の若者はキレやすいつて言つだろ」

優が勝ち誇ったかのような顔をしている。

その表情と言動に穹は思わずため息を吐いてしまう。

「はあ、確かにそんなこと言われてるけど、優もその最近の若者なんだよ」

「確かにそうだが、精神年齢は大人だ。大人の俺がテスト受けるのって可笑しいと思うんだが、どう思う?」

優の言いたいのは、ようするにテスト受けたくないってことだ。そして、これが優の頭で思いつく、テストを受けなくてもいい言い訳なのだろう。

「優、大事な話がある」

「ど、どうしたんだ? 穹。お、俺はテストを受けたくない言い訳を言ったんじやないぞ?」

(うわあー、優の奴自爆したよ。でも、可愛そうだからツッコミはやめとこう)

「いや、非常に言ひにくいくらいだけれど、この世界では15歳で成人だよ

「えつ! ?」

大人だから受けなくていいと言つ優の理屈を根本から覆すのが、15歳で成人だと言う事実だ。

優は思いがけない事実に、声が出せなかつた。

そんな優に穹は、笑顔で止めの一言をかける。

「だから、優は中間テストを受けなくてはいけません」

その後の優は何も話さず、死んだ魚のような顔で学校まで行ったのだった。

「テストどうだった?」

「うーん、まあまあかな」

「簡単でしたね」

「それほどレベルは高くなかつたと思ひます」

「わ、わたしは昨日勉強したところが出たので、なんとか」

「あたしも昔から留つてたことだから、余裕だつたわね。ユウ君は?」

「分からん。全く分からん」

「……じゃあ、みんなで答え合わせじょつか」

優の発言で凍つてしまつた空氣を、窓が話題を変えて換えた。

アイラ 窓 フェルミ ヒューリイ ハリン アイラの順に発言する。そして、話を振られた優は顔を青くしていた。

「そうですね。では、歴史の問題からで、『戦争や、侵略をしないと言つ協定を何と言つて答へよ』この問題は何て書きましたか？」

「「「「平和協定」」」

「……不可侵条約」

「「「「・・・」」」」

フェルミが問題を読み、優以外の全員が同じ答えを答える。そして、優の顔がさつきよりも真っ青になる。

「優、協定を聞かれてるのに、条約を答えてどうするの？それにそれはドイツとロシアの条約だよ」

「たしかにそうだったな。次頼む」

優はどうやら、まだ精神ダメージを喰らいたいらしいことは思つていた。

それとは逆に優は、次こそ当てて自信をつこうと思つてこるのである。「じゃあ、僕が出すね。精靈学の問題で、『精靈術では上位精靈以外は武器に憑依させる』ことで、呪喚できますが、なぜ武器に憑依させないといけないのか答へよ』

「自分は、下位、中位の精靈は実体がなく意思を持つたエネルギー体だから、入れ物となる器、つまり武器が必要。って書きました」

「わ、わたしも同じような」と書きました

「あたしは上位精靈は武器に憑依させなくてもいい、つてことも書いたわね」

「私も上位精靈まで書きましたわ」

少々答えにバラつきはあるが、皆言いたいことは一緒に。その中でまだ答えてない優が明後日の方を向いている。これは本格的に壊れたかもしれないと思い、穹は追い討ちをかける。

「優は何て答えたの？」

「俺か？俺は、……下位、中位の精靈は死者を鍊成しようとして、真理に体を持つてかれた。って書いた」

「・・・」

（これって優は本気で書いたのか？ただネタで言っているのかもしない。なら、ツッコミを入れないと可愛そしだし、本気で言つてたとしたら、ツッコミを入れたら可愛そしだ。これはビックリにするべきなんであろうか）

元ネタの分かつてない穹以外のメンバーは、何を言つてるのか分からぬといつた表情。

穹は、まさかの場面での登場だったので、笑いを堪えるのに必死になる。

「まあ、とりあえず優、今日は帰つて勉強しようか」

「……そうだな」

空気にも耐えられず窓が優に提案する。

それに優は、窓からはるか上空を見つめながら返事をする。

今日の科目は、歴史、精靈学、数学だった。

明日は地理、魔法学、国語だ。

そして3日目は、騎士になつたら即編成のチームでも、すぐに作戦を作り、行動することが要求される。とのことで、3日目は他クラスも混合で作られたチームで実技試験だ。

そして、帰つてからの勉強は、国語は問題なし、地理は今更とのことで魔法学にだけ集中して行われることになった。

中間テスト？（後書き）

やつと中間テストですね。

このままだと、行事やつて2話ぐらい日常パート入れて、また行事つてループになりそうな気もしてきましたねえ。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願ひします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願ひします。

中間テスト？

「優、今日はできた？」

「おひ、バツチリだぜ」

「じゃあ今日も答え合わせやひつか

優の顔が一瞬だけ強張つたが、すぐに元に戻る。
昨日の答え合わせで全然ダメだったから、軽くトライアマになつてい
るのかもしね。

「しかしよお、『地図にある国々を書きなさい』って簡単すぎだろ
『最初のテストだし、そんなもんだよ』

「優さんは三大国の名前はきちんと書けたのですか？」

フェルミの質問に、優は当然と言わんばかりの態度で答える。

「まずこの国がベネズス王国。西にある大国が「レスチア王国。東
の大國がレイアン王国」

「セーはちゃんと覚えてたんだ

「国名だけだけどな」

その言葉に他のメンバーは苦笑いを浮かべる。

確かに昨日は地理の勉強はしてなかつたのだから、優のことを考えるところの程度だらう。

「じゃあ、国語ができなかつたとは思えないから、魔法学は？」

「授業も聞いてたし、平均点ぐらいは取れると想ひだ」

「それなら、今回は大丈夫そうだね」

「一日は、と続く意味で窓は言つたのだが、優にはそれが頭が回らなかつたらしい。」

「それより気になつてんだがよ、明日って何すんだ？」

「テスト前に説明してましたけど、聞いてなかつたんですか？」

「フュルミ、人の話を聞くことを優に求めるのは不可能だよ」

「そうでしたね」

「おい、お前ら、本人の前で失礼だと思わねえのかよ

「思わないわね」

「思わないでしちゃうね」

「わ、わたしは……分かりません」

優が窓とフュルミに向けた言葉だつたが、アイラ、ヒューリイ、エリンが答える。

「とりあえず、優、明日は森で実習だよ。班は当田発表だから離れる可能性の方が高いかな」

「着替えとか飯はどうするんだ?」

「朝から始まって日が暮れるまでだからいらなによ」

「ふーん。でもよお、俺とか竜とかフェルミって今更、そんなんやつても一緒にやね? 強いのは選択科目で分かってるんだしそお」

魔法の選択科目では、火属性の中で一位がフェルミ、二位が優。精霊術では一位が竜。
格闘技でも、剣術で一位が優。弓術で一位が竜、二位がフェルミなのだ。

もはや、テストするまでもなく最高評価が見えているのだろう。

「ねえ優君。今回の実技の試験での目的は力も大事だけど即席チームでのチームワークとかの協調性を見るんだよ。だからこそやる意味があるんだって言ってたよ」

「ふーん、そんなもんなのか」

「ねえフェルミ。今年の一年強そうな人とかつているの?」

「レイアン王国の第一王子が珍しい魔術を使うことで有名です。あとは「レスチアの天才と呼ばれてる方もいます」

「へえ~、じじって他国の奴も入学できただんだな」

話の内容よりも別の部分に驚いている優に、他のメンバーから哀れみの目を向けられる。

「そのレイアンの第一王子が使う魔術ってどんななの？」

「噂でしかないのですが、すでに失われた魔術である陰陽術を使うらしいです。なんでもかなりの天才らしくて、兄がいるんですが、その兄ではなく第二王子が王位を継ぐかも知れないらしいです」

「そんな人が外国の学校に来ててもいいのか僕も疑問に思えてきたよ」

「レイアンでは王族の中で最強の者が勇者になるらしいのですが、現勇者はその方らしいです」

「なんか人目見たくなつてきたよ」

窓の言葉に優とエリン以外の全員が頷く。
優はどれくらい凄いのか分かつておらず、エリンは会つたら失神するかもとのことで頷けずにいた。

「コレスチアの天才は？」

「そちらの方も勇者です。コレスチアでは年に一回の大会での優勝者が選ばれます。その方は初出場から3連覇中の勇者です」

「どんな魔術を使うかって分かつてるの？」

「こちらも変わった魔術としか聞いてません」

「つてか、今年は勇者多すぎだろー。」

またも優がずれた指摘をするが、一応全員が思っていたことだった。

「三大国の勇者が全員同じ年つてのは、おそれく初めてのことですね」

「そいつらとは戦いたくねえな」

「僕もそう思うよ」

「どうしてですか？」

ヒューリイの問いかけに一人は顔を見合させて宣言する。

「「めんどくわうだから」「

「あつ、そうですか」

「でも、こずれ戦う」とはなるとゆづり。

「どうして?」

竈の問いかけにアイラはため息を吐きながら答える。

「竈君も何にも分かつてないわね。いい? 各国での競技大会とかがあるんだから、そんなイベントには勇者は強制参加させられるんだから、いずれ戦うことになるに決まってるじゃない」

ああーと二人とも納得する。

「その前に魔術学校内での武道会や、模擬戦とかで戦うことになると思いますけどね」

「でも、校内戦じゃ実力は出さないと思しますよ」

「じゃあ、この先で一番めんどなうのは競技大会ってことでいいのか？」

「たぶんいいと思つむ」

ヒューリー、フルミ、優、寄の順で発言する。
エリンはほとんど黙っているが、口数の少ない人なので、特に異常はない。

「ねえフェルミ、競技大会の日って風邪で休みとかってダメなの？」

「怪我でも病気でも治癒魔法で一気に回復させられるのがオチだと思じますよ？」

「やつぱりそうだよね」

「まだ先のことですし、とりあえずは明日の実技試験ですよ」

「……それも憂鬱だね」

その日は空気が悪い方向に進みつつあったので、これで解散になつた。

中間テスト？（後書き）

エリンとヒューイが空氣です。

扱いにくい子は嫌いですね。

何かこのままだと出番が減らされそうな気がするので、何か大役でもあげようかなと思つちゃいます。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願ひします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7364y/>

2人で1人の勇者様

2011年12月19日17時28分発行